常陽藝文

1983年10月11日 第三種郵便物認可
通巻第432号（毎月1回1日発行）2019年5月1日発行
2019/5月号
公益財団法人 常陽藝文センター

●藝文風土記●

人が造った港・人が支える仕事

鹿島港 水先人物語

鹿嶋市、神栖市

鹿島港1番ブイから北東約3海里（約5.6km）の沖合でタグボートからパナマ船籍のケミカルタンカーに乗り込む水先人

藝文風土記

人が造った港・人が支える仕事

鹿島港 水先人物語

鹿嶋市、神栖市

今年で開港五十周年を迎える鹿島港は、潮の香りのしない港だ。鉄鉱石や石炭、原油、穀物などの原料を迎え入れ、化学薬品や鋼材などの製品にして送り出す――日々膨張を続ける臨海工業地帯には約一七〇の企業が立地し日本最大級のコンビナートとして発展、新たな火力発電所も送電線の敷設がすでに始まっているという。

茨城県南東部に位置し首都圏東側の物流の生命線を握る広大な港は、岸壁数を多く確保するためにY字に掘り込まれた航路を持ち、年間一万一千隻に及ぶ船舶がここに接岸し、出ていく。

AIS（自動船舶識別装置）によって大型船舶の位置と種類は色分けされ、港湾関係者に常に把握されている。入港してくる船もハイテク化が進み、通信士は消え船員の数も減った。GPS（全地球測位システム）の登場で航海士が星を観測して位置を把握することもない。半世紀が過ぎ、すべては効率的になり安全になったかのように見える。だが、ひとたび鹿島灘から強い北東の風が吹き込めば話は別だ。ここには、昔から何一つ変わらぬ〝人が支える〟仕事がある。

＊鹿島水先区水先人会のあるエリアは通常、関係者以外の立ち入りが禁じられています。

＊文中登場人物の多くは敬称を略させていただきました。なお（ ）内の年齢は取材時のものです。